

2021年10月3日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 山田紀子

奏楽 大谷京子

前奏

招詞

Iコリントの信徒への手紙 第1章8節―9節

讃美歌

讃美歌 21-7-1 (ほめたたえよ、力強き主を)

交読

詩編 第61篇 (p. 65)

祈祷

聖書

マルコによる福音書 第14章53～65節

(新約 p. 93)

讃美歌

讃美歌 21-343-1 (聖霊よ、降りて)

説教

「神のものさし」

ここに耳慣れない言葉が出てきます。最高法院です。今で言えば国会のようなもの、あるいは裁判所のようなものです。ちょうどイエスさまがおられた頃、この議会が社会の柱でした。構

成メンバーは祭司長、長老、律法学者たち、全部で 70 人。これに大祭司がひとり加わると 71 人の議会です。その会議がここでイエスさまを裁判にかけ、死刑にした方がいいという判断を下す。そのことがここに書かれています。

この聖書箇所を、わたしたちはどのように受けとめるでしょうか。おそらく感動したとは思えないでしょうし、わかりにくい、という感想を持つかもしれません。ただこの後に、イエスさまが十字架につけられるという場面が来ます。そうすると、ここで裁かれておられるイエスさまはいったい何を語られたのか。何を思っておられたのか。そのことをはっきりととらえたいと思います。

まず最高法院です。当時ユダヤ人の、神さまを信じている人たちの代表者の集まりです。信仰も知恵もある人たちが集まっています。ところがその人たちが、イエスは死刑だと決めます。ただし、当時ユダヤの人たちはローマ帝国の支配下にありました

から、自分たちで死刑執行はできなかった。特に、最高法院のメンバーが望んだのは、神さまを信じていないローマの権力の力で、しかも、皆が一番恥ずかしくて恐ろしいと考えていた、十字架につけられて殺される、という死刑を、イエスという者が、受けるようにしたいということでした。「十字架につけられる」、それは「木につけられる者は呪われる」とおきての書物に書いてあって、神さまに呪われることを意味しました。神さまに呪われるというのは、神さまのもとから追い出される、追っ払われること。どんなことがあっても、神さまの祝福にあずかることができないところに追い込まれる、そういう恐ろしい死の中に、放り込んでしまいたい。単に自分たちのいるところから出て行ってもらいたいというわけではありません。徹底的に、主イエスを憎んだ。おそらくそここのところが、わたしたちの腑に落ちないところではないか。たとえば、キリスト者でない人がイエスという言葉聞いても、イエスという方は立派な方です、偉人ですということ、少なくとも、イエスという方は良いお方であると評価すると思います。

そうするとなおのこと、どうしてこの時の人たちは、イエスという方を寄ってたかって殺そうとしたのか。そんなにも心根の曲がった人たちばかりだったのだろうか。これはわたしたちが、いつでも問い続けていかなければならない大切なことです。

この当時の人たちは、神さまを信じていた。神さまの救いを待ち続けていた。いったい、誰がどんなふうに救いを与えてくださるのだろうかと待っていました。それなのに、わたしこそ、その救い主だと言われて来てくださったイエスさまを殺してしまう。どうしてそんなことをしたのだろうか。イエスさまが与えてくださったものが、あまりにも小さかったからだという考え方もできます。でも果たしてそうなのだろうか。

わたしたちがしばしば口にする言葉に、「わたしなんか」「わたしのような者が」と、おそらく謙遜から出てくる言葉があります。ところが、こと自分の救いに関してこの言葉をつい出してしまうのはどうなのか。ある説教者がこう言いました。

つまり、わたしたちの救いを些細なことと思っはいけないのです。なぜなら、わたしたちが救いを些細なことと思うのは、わたしたちがわずかなものを受け取ることしか、望んでいないことになるのです。

わたしたちは自分たちの救いを小さくしてしまう。それは言い換えれば、わたしたちが神さまから期待するのが、とても小さいということになります。

そう言われて納得するでしょうか。しないかもしれません。というのも、わたしたちは普通、自分が神さまの救いをそんなに簡単に小さくはしていないと思っているところがあるからです。神さまが与えてくださっているものは、自分たちが考えるよりも、もっと大きなものであるはずだ、自分たちが予想するよりももっと大きいものであるはずだと思っていてもいいはずです。ところがそうではないのではないか。それに気づきなさいというのです。

もし小さくしてしまうのなら、どうしてでしょうか。わたしたちは、神さまの恵みは自分たちが考えるよりも大きいことを、いつも素直に受け入れているでしょうか。わたしたちが救いについて持っている物差しは小さくないでしょうか。その物差しで計って、こういう救いだったら受け入れますと用意している心が、実は案外小さいのではないか。わたしたち日本教会の歴史で最初の頃の優れた指導者のひとりに、富士見町教会を建てた植村正久という牧師がありますが、その牧師の説教に、「キリストを小さくするな」という題のものがあります。イエス・キリストを小さくしないようにしようというのです。同じことです。わたしたちが神さまの救い、イエス・キリストの救いとは、こういうものであるはずだという期待を持っていて、その期待という物差しで神さまの言葉を計る、牧師が語る言葉を計る、教会の仲間が語ってくれるものを計って、その物差しにぴったりと合ったもの、それがわたしたちの気に入ったもの、わたしの口に合うものとする。そして、それだけを受け入れる。案外そうしていないでしょう。そ

して物差しに合わないもの気に入らないから捨てる。どうしてか。自分より本当に大きなものに捕らえられたり、大きなものの前にひれ伏したりしたら、自分を変らなければいけなくなる。ここが、わたしたちにとってとても難しいところです。自分の物差しを一度捨てなければならない。わたしたちにはそれができないのです。そんなことはできません。そんなことをしたら、自分はどうなってしまうのか。このわたしの生活は、どうなってしまうのか。そう思うから、自分の物差しを頑なに握りしめています。

ここでの裁判の手続きは、一面では、きちんと行われています。複数の証言が同じでなければ、罪状にはならないということです。つまり、一人の証人が、自分の言いたいことを言うだけでは証言として採用されない。ところが、実際に次から次へと証言が出て、皆食い違ってしまうので、どうも裁判が上手くいかない。それが初めの状況です。

そのなかではっきりと浮かび上がってくる証言が 58 節。

「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました」。この最高法院で、権威を持っている人たちは皆神殿と結びついて生きている。その神殿をぶち壊してしまう。これは人間が造ったもの、わたしは壊して、三日目に造り直して見せる。しかも、手で造らない別の神殿を造って見せる。イエスさまがこのとおりのことを言われたという記録は、福音書の中にはありません。ただヨハネによる福音書第2章には、イエスさまがエルサレムにお入りになって、神殿で商売をしている者を、縄を鞭の代りにして追い立てられて、そこで、あなたがたがこの神殿を壊してごらん、そうしたらわたしは三日目に建て直してみせるとおっしゃったという言葉が残っています。それから、このマルコ福音書では、第15章の29節で十字架につけられたイエスさまについてこう記します。「そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。『おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ』」。神殿を壊して三日で建てるなどと豪語していたではないか。

それだけの力を持っている者が、十字架から降りることもできないのか、と言ってからかった。さらに使徒言行録を見ると、神殿を壊すと言った者のやからであると言って、初代の教会のひとたちは、しばしば非難され、迫害されています。おそらく基本的には、同じ言葉ではなかったかもしれないけれど、同じ意味の言葉、似た意味の言葉を、イエスさまがお語りになったと考えることはできます。

このエルサレムう神殿が造られたとき、造営にあたったソロモン王は、神殿を神に献げながらこう祈りました。「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができましようか。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません」。このような神殿に、あなたを閉じ込めようなどということは、少しも考えていませんと祈りました。最高法院の議員もソロモンの祈りを覚えているはずですが、覚えているけれど、実際の生活の中では忘れる。神殿を造り、そこで礼拝を守り、そこで自分たちの信仰生活が、しっかりしたものにな

ったと思った時に、それにしがみつく。そこから自由になれない。神殿を超えて生きておられる、主なる神の姿を見ることができなくなる。信仰の幻を失います。

その時に、もっと深刻なことが起こります。61 節、証言をいくら聞いても、決定的な証言が得られない。とうとう大祭司が真ん中に出て行って、お前にとって不利な証言が続くけれど、それでいいのかと尋ねる。イエスさまは黙っておられた。そこで畳みかけて、「お前はほむべき方（神）の子、メシアなのか」と問いました。いつも、お前がそう言っていると聞いているが、という意味でしょう。そこでイエスさまは言われました。「そうです」。わたしがそれである。このマルコによる福音書は既に第 2 章で、注目すべき出来事を書き記しました。イエスさまが中風の人をお癒しになったとき、その中風の者に向かって、わたしは、あなたの罪を赦す、床をとって歩きなさいと言われた。そこでそこにいた律法学者、この最高法院の裁きの場所にもいたかもしれない律法学者たちは腹を立てた。神さまでもない普通の人間が、神のよ

うに罪を赦すなどということが出来るか。その眩きを聞きながらイエスさまは言われた。「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」。

「人の子」という言葉が、そこでも出てきました。ここでもイエスさまは言われました。「あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」。「全能の神の右に座り」というのは、詩編第 110 篇の、最初の言葉です。この詩編と、ダニエル書第 7 章のふたつの神の言葉によって、イエスさまは、ご自分を明らかにしようとなさった。そこで「人の子」という言葉が使われます。「人の子」、これには確かに普通の人間という意味が一方ではありますが、同時に、ダニエル書が語るように、獣ではない、まともな人間の到来が、われわれに最後の神の救いの勝利をもたらすという預言が語られた時に、この言葉が使われました。

イエスさまをどのような方として理解するのか。人間が勝

手に思い描くような超人ではありません。ただの人です。まことの人間、わたしたちと同じ肉体をもった人間です。その人間が、神の子であられる。そこに、わたしたちの信仰の急所があります。そうでなければ、わたしたちを救うことはできない。わたしたちと、同じ人間になってくださった。そして、ここでその同じ人間として、罪を犯した人間として、罪を犯していないにもかかわらず、罪人として裁かれようとしておられる。しかも、罪ある人々の手によって裁かれようとしておられる。そのように、父なる神の御心に忠実に従っておられるイエスさまが、ここで人々に、わたしが、天の雲に乗って来るその姿をあなたがたは見ると教えられた。あなたがたも、幻を見るのだと言われた。この幻とは何か。わたしたちの物差しを越えるものです。たとえば、この後、とうとう、死刑にすべきだという決議があって、そして、たぶん縛られたままのイエスさまを囲んでいた人たちが、つばを吐きかけ、目隠しをして、こぶしで殴って、「言い当ててみろ」と言った。この言葉は、これも正しいのですが、元々は、「預言しなさい」という言葉です。けれどここは違います。聖書が預言と言っているの

は、これから誰が殴るか、当ててみなさいと前もって言い当てる  
ということではなく、わたしたちの知恵、わたしたちの物差しを  
越えて、神さまの言葉を語ること、神さまの言葉を預かって語る  
ということです。それをするのが、預言者の意味です。ところが、  
ここでイエスさまをひっぱたいたり殴ったりしている人たちは、  
せいぜい預言するというのは、そんな程度の事としてか考えてい  
ない。

下役は、このぐらいのことでしか、イエスさまを試すこと  
ができない。その小さな物差しでの試しに、イエスさまは黙って  
おられる。当てることは何でもなかったはずですが、そこ  
ではイエスさまは、ただ打ち叩かれるただの人であり続けられた。  
しかも、この時にも、イエスさまご自身は幻を見ておられたと思  
います。どんなに人が悪くなっても、どんなに人が残酷になっ  
ても、神の愛と義とは、必ず勝つという幻です。

先ほども申しましたように、使徒言行録には、たいへん興

味深い記事が出ています。第6章の13節に、最初の殉教者になったステファノの話です。このとき、ステファノは、イエスさまと同じように最高法院に引っぱって行かれた。このステファノという伝道者もまた、最高法院で裁かれます。多分同じ顔ぶれだったと思います。そこに集まっている人は、また、あのイエスの手下たちが騒動を起こしたかと、苛立っていたかもしれません。そこで偽証人を立てて、訴えさせたその訴えはこうでした。「この男は、この聖なる場所と律法をけなして、一向にやめようとしません。わたしたちは、彼がこう言っているのを聞いています。『あのナザレの人イエスは、この場所を破壊し、モーセが我々に伝えた慣習を変えるだろう』」。同じことを言ったのです。しかも、使徒言行録はすぐにそれに続いて書いた。「最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら天使のように見えた」。顔が違う、彼らが見慣れていた顔ではない。つまり、神が見ておられるものを見ている者の顔つきになったということだと思います。信仰の幻を見た。そこで大祭司が「訴えのとおりにか」と尋ねると、それに答えた長いステファノの説教が残っ

ています。このステファノの説教も、とても大事です。どうしてかと言うと、このステファノの説教は、ステファノがここで説教しただけではなくて、当時の人たちが、同じ内容の説教を繰り返したのではないかとされるからです。

ここでステファノの説教を紹介することはできませんが、最後のところ、第7章47節に彼はこう語ります。

神のために家を建てたのはソロモンでした。けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは預言者も言っているとおりです。

『主は言われる。

「天はわたしの王座、

地はわたしの足台。

お前たちは、わたしに

どんな家を建ててくれると言うのか。

わたしの憩う場所はどこにあるのか。

これらはすべて、

わたしの手が造ったものではないか。』』。

神さまは天を超え、地を超えて存在し、しかも至るところに、自由にご自身の礼拝の場所をお造りになる。どうして、エルサレムの神殿にこだわるのか、とここで神の自由を語り、神の愛の自由を語りました。けれど人々は、それを聞いて腹を立て、逆にステファノを殺します。更に 55 節、「ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、『天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える』と言った」。ここで不思議に思うことがあります。人の子が神の右に座っておられるのではないのです。立っておられるのです。ステファノは、イエス・キリストが神さまの右に立って、こちらをおられるのを、幻の中で見ているのです。どうして立っておられたのでしょうか。ステファノは、自分のためにイエスさまが立っておられたと信じたのではないか。。ここで打ち倒されるステファノを見て、神の右にあるイエスさまが立っておられる。この幻は大きな、とても大きな、そして深い望みを語る幻だと思

います。そして、この幻はわたしたちにも見ることができるもの、信仰によって見る時に、「イエスさまはわたしのために立ってくださった」という幻を見ることができる。

日ごとの中で、わたしたちが、自分の物差しで一喜一憂する時、わたしたちが自由になる。それは神さまの大きな物差しの中で、生き続けることです。神さまは変わらない。イエス・キリストを送ってくださった神さまの確かさは変わらない。だからわたしたちは、主イエス・キリストとその救いのみわざを小さくしてはいけません。キリストを小さくしないよう、そこで、戦います。年を重ねた者も若い者も全てを生かす、神さまが与えてくださる大きな幻による戦いです。すべての思い煩いから自由になって、この幻に生きたいと心から願います。祈ります。

主イエス・キリストの父なる神さま、わたしたちをさまざまな絆から解き放ってください。あなたにつながって生きること  
に過ちがないことを、堅く信じさせてください。その時、多くの



聖霊との親しき交わりとが、  
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>